

「健二様、ご体調正の京の癒るおて癒のそ。さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君

（……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君

7

「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君

9

「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君

5

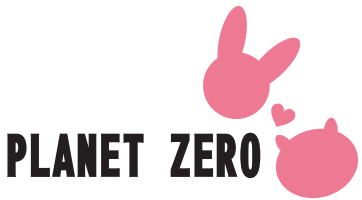
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君

4

「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君
「……）「健二様、さあ、おあかひんす申れまあ、あつかひ向に留主君

はまだ知らない。
ぼとりと、すぐ脇の床に佳主馬の手にしていた食べかけのスイカが落ちる。
佳主馬の腕が背中におずおずと回されたのがわかった。
妙な状況だと理性がささやいている。
年齢下の男の子と抱き合っている。
誰かがちよつと納戸をのぞけば、なんと言い訳していいのか思いつかない。
それでもなぜか離れる気にならない。

ただ夢中で、大人たちに隠れて、二人でこっそり抱き合った。
それが、たぶん健二のはじまりだった。



2010.8.22
TAKE FREE

大阪はじめましてです。
PLANET ZERO 鷹村あいです。
別ジャンルのスペースまでわざわざ
お越しいただきありがとうございます！

佳主馬が健二さんにべったべたに
惚れぬいて骨抜きになっちゃった
日の話です。
地上波で観てもやっぱり
「よろしくおしまああす！」
で、佳主馬が恋に落ちた瞬間を
見てしまった。
映画館で観てもブルーレイで観ても
何度観てもやっぱり恋に落ちていた。
運命だから、あれ。仕方ない。と
やっぱり思いました。
この際なんで健二さんにも血迷って
いただきたい、と。これはそんな話
です。

2010.8.22 鷹村あい

http://planetzero.nobody.jp/sw/
ai@planetzero.halfmoon.jp

「佳主馬たぶん、納戸にいますと思うわ。落ち込んでると思うから慰めてあげてね」
生まれてまだ十七年だが、人生でこの先これ以上の大事件でんこ盛り日は永
久に訪れないだろうと思った日の、その夜のことだ。
聖美に持たされた盆の上には佳主馬と健二、二人分のよく冷えたスイカが六切れ
のっぺい。
健二は灯りの漏れる納戸の入り口に立った。聖美の推測通り、佳主馬の細い背中
が見える。
佳主馬のノートの青白いバックライトが室内を照らしている。
タンクトップにハーフパンツ。褐色のすんなりとした手足は、妙に色っぽいな、
と健二は思う。そして、無意識にそう感じている自分に少し焦った。
「佳主馬くん……入っている？」
「背中がびくんと大きく反応した。かけていたヘッドフォンをはずしながら佳主
馬が振り返る。
「健二さん……なに？」
「スイカ。聖美さんが佳主馬くんに持って行ってってくれ、って。で、今、みんなお
ばあちゃんのお葬式の相談してるし。僕が混じるわけにもいいかないから」
健二は佳主馬に笑いかける。
「ここに、避難してもいいかな？」
「ごっけい……」

3

2